2025/2/23

ルカの福音書　講解メッセージ㊺

『ルカの福音書 19 章 1-27 節　ザアカイの信仰』

「それからイエスは、エリコに入って、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。」（ルカ 19:1-6）

当時「取税人」とは罪人の代名詞で、人々から嫌われる存在でした。その取税人のリーダーであるザアカイは、イエス様がどんな方かを見ようとしましたが、背が低かったため、群衆に遮られて見ることができませんでした。そこで彼は前方へ走り、イエス様を見るために、イチジク桑の木に登りました。

ザアカイが木に登った行動は、彼が救いを求めていたことを示しています。自分の罪深さを誰よりも知っていた彼は、光を求めていたのです。

「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。」（ローマ 11:36　新改訳）

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」（ローマ 11:36　新改訳）

私たちは、神のいのちから始まり、神によって保たれ、神に向かって導かれています。ザアカイの心の奥にあった「神を求める思い」は、神のいのちが彼を動かしていた証しです。

イエス様が、ザアカイに向かって声をおかけになると、ザアカイは急いで降りてきて、イエス様をお迎えしました。これは、ザアカイが神の呼びかけに応答し、神と和解したということです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

人間はもともと、罪を犯さない良き者として造られました。しかし、この世界に死が入り込んだことによって、神と分離してしまいました。聖書は、これを「死人」の状態と呼びます。この「死人」が、神の呼びかけを聞き、応答することによって「生きる者になる」と聖書は教えます。これが、先ほどザアカイに起きた出来事です。こうして彼は救われました。

この神の呼びかけは、「心の中」すなわち、潜在意識の領域で聞き、応答するものです。そのため、救われた人たちは、いつ自分が呼びかけに応答して救われたのか、自分の意識上では分かりません。しかし、なぜか心に喜びが訪れ、やがてキリストの御言葉を聞くことで、「自分は救われている」という自覚に至ります。

ザアカイも、この時点ではまだ自分が救われたことに気づいていませんが、このあとイエス様との会話を通して、それを知ることになります。

「これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言ってつぶやいた。」（ルカ 19:7）

イエス様がザアカイの家に行かれたということは、救いがザアカイに訪れたということです。

ところが、イエス様がザアカイの家に行かれたことに対して、人々はつぶやきました。「ザアカイのような悪い人間が救われるはずがない」と思っていたからです。

この世界では、行いを通して人を知り、判断し、人の価値を決めます。しかし同じ方法で神を知ろうとすると、必ずつまずきます。なぜなら、神は行いに関係なく人を愛し、救われる方だからです。

人間的な物差しで神を理解しようとしてはならないのです。

「ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」」（ルカ 19:8）

ここでザアカイは、自分の罪を告白し、悔い改めています。この場面は非常に重要

です。なぜなら、ザアカイは、救われた後に悔い改めているからです。

多くの人は、「罪を悔い改めるから救われる」と考えます。しかし聖書の順序は逆です。まず神が救ってくださり、救われた者は、自分の罪を後悔するようになるのです。

そもそも、悔い改めとは「向きを変える」という物理的な意味です。つまり、「神のほうに来なさい」と言われているだけなのです。「私はあなたを受け入れる。だから私のほうに来なさい。」――、これが、イエス様が語っておられることなのです。そして、救われた喜びを知り、人は初めて心から罪を認められるようになります。

この順序は大変重要です。私たちは神の呼びかけに応答すれば救われるのです。

> 「イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」」（ルカ 19:9-10）

神が来られた目的は、罪を裁くためではなく、人を救うためです。

ここでザアカイは初めて、自分が救われていたことに気づきます。「この喜びは、救われた喜びだったのだ。」と。

人はもともと罪を犯さない良き者として造られました。その私たちが、罪を犯すようになったのは、死が入り込んだからです。死とは、私たちの存在を否定する力です。その力が心に入り込み、神が見えなくなりました。

神が見えなくなると、不安が生まれます。その不安を埋めるために、見える安心を求めるようになります。それは比較による安心です。するとそこに、 嫉妬、妬み、怒り――そうした感情が生まれます。そしてそれが、「自分さえ良ければ」という行動へと私たちを走らせます。

こうして人は悪いことをするようになりました。すべての人がそうです。

しかし、本来、私たちは悪いことをしたくないのです。むしろ神によって支えられ、神が肯定してくださっているので、悪いことをすると心が反発を覚えます。

だからイエス様は、人を裁くためではなく、死という病から救うために来られました。ザアカイは「神は自分を裁くために来られた」と誤解していましたが、イエス様はこう言われます。

「私は失われた人を探して救うために来た。」

死が入り込んだことで神との関係が断たれた「失われた人」を救うために、イエス様は来られたのです。

■一ミナのたとえ

「人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現れるように思っていたからである。」（ルカ 19:11）

人々は、「神の国がすぐ現れる」と誤解していました。しかし、イエス様が語ろうとしている「神の国」とは、私たちが肉体の死を迎えた時、神が迎えに来てくださり、天国へ引き上げてくださることを指します。

私たちは救われ、神と和解しました。しかし、和解した瞬間に天国へ行くわけではありません。しばらくの間、この地上で生きる必要があります。

その間、イエス様は私たちに「あるもの」を与えてくださいます。その「あるもの」とは、この続きにある「ミナ」のたとえで語られる「ミナ」です。

「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。彼は自分の十人のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、これで商売しなさい。』」（ルカ 19:12-13）

「身分の高い人」とは、イエス様のことです。「遠い国に行った」とは、十字架の復活の後、天に昇られることであり、その後イエス様は再び戻ってこられることを示しています。

そして、十人のしもべとは、救われた者の象徴であり、十人のしもべに十ミナということは、それぞれ一ミナが与えられるということです。この「ミナ」とは聖霊を象徴しています。つまり、神と和解した者に与えられる「ミナ」とは、聖霊です。

「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。」

（ヨハネ 14:16-18）

神と和解した者は聖霊の宮となり、助け主と共に福音を語り、救われる人を増やすように導かれます。

一ミナで商売するとは、福音を伝え、救われる人を増やしなさいという意味です。

福音を語ることは困難を伴います。しかし、助け主である聖霊が助けてくださいます。そして、福音を語ることを通して、信仰・希望・愛という永遠の財産が心に実ります。これが、天国へ持っていける唯一の財産です。

ザアカイも救われましたが、福音を聞かなければ救いの自覚には至りませんでした。神が人を救い、私たちはその人を「刈り取る」―― これが伝道の働きです。

> 「しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません』と言った。」(ルカ 19:14)

まず、イエス・キリストが声をかけられたのに、それを拒む人がいることが示され、次に「忠実な者たち」の姿が語られます。

> 「さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らを呼び出すように言いつけた。さて、最初の者が現れて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』」
>
> (ルカ 19:15-19)

最初のしもべは、聖霊の助けによって福音を語り、十人を救いへ導き、信仰・希望・愛という永遠の財産を手にしたことを象徴しています。

次のしもべも、五人を救いへ導き、信仰・希望・愛を手にしました。

> 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒 1:8)

聖霊を受けた者は、どこへでも出て行き、キリストの証人となり、福音を語り、人

を救いへ導くことができるのです。十ミナのしもべも、五ミナのしもべも、聖霊の力によって忠実に働いた者の姿を表しています。

しかし、続く三番目の僕は言いました。

> 「ご主人様、ここにあなたの一ミナがあります。私は恐ろしくて、風呂敷に包んでしまっておきました。」あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』（ルカ 19:20-21）

これは、クリスチャンの中で最も多いタイプです。

救われているのに、聖霊を受けているのに、恐れのために福音を語れない人たちを表しています。「嫌われたらどうしよう」「人からどう思われるだろう」……その恐れによって、口を閉ざしてしまうのです。

> 「彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」」（創世記 3:10）

これが、神から離れた人間の姿です。しかし、語らなければ聖霊は働きません。信仰・希望・愛という御霊の実は結びません。ですからイエス様は次のように言われました。

> 「主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』」（ルカ 19:22-23）

ここでいう「銀行」とは、礼拝を守ることの象徴です。

イエス様は「伝道できなくてもいい。しかし礼拝だけは守りなさい。」と言っておられるのです。礼拝を守っていれば、御言葉を聞くことで信仰が少しずつ育ち、神への信頼・希望・愛が芽生えます。しかし、礼拝を離れてしまえば、 救われていても何も残りません。天国には行けます。しかし、手にするものが何もないとは、なんともったいないことかと、イエス様は語っておられるのです。

このしもべは、恐れによって、イエス様のことを誤解していました。現代でも多くの人が「人につまずいた」と言います。しかし聖書は、人との関係は神との関係の投影であると教えます。人を愛せない人は、神を愛していないと聖書に書かれています。ですから、相手を変えようとするのではなく、自分が神に愛されていることを知らなければ、人間関係はうまくいきません。

私たちの王はイエス・キリストだけです。神の前で生きるとき、人との関係も整えられます。

> 「そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています』と言った。彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物までも取り上げられるのです。』」（ルカ 19:24-26）

持っているものとは、「信仰・希望・愛」です。持たないものとは、この世界の富だけを求め、永遠に残る「信仰・希望・愛」は手にできなかったということです。

この世界の富はすべて失われます。残るものはただ一つ――神との関係から生まれた信仰・希望・愛だけです。

このことが、Ｉコリントには、次のように語られています。

> 「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」（Ｉコリント 3:11-13）

私たちの土台はイエス・キリストです。 この土台は永遠性を持ち、決して有限のものではありません。ですから、永遠の土台の上には永遠のものだけが残るという原則が生まれます。どれほど多くの有限のものを積み上げても、永遠の土台の上では残ることなく、やがて消えていきます。

ここで語られる「金・銀・宝石・木・草・わら」は、この世界の富や目に見える安心を象徴しています。どれほど立派に見えても、それらはすべて有限のものであり、

永遠の土台の上にはとどまりません。

そして、すべてが明らかになる“その日”とは、肉体の死のことです。肉体の死は、私たちが人生で築いてきたものが本物だったのかどうかを照らし出します。火によって試されるように、永遠に残るものだけが残り、残らないものはすべて焼き尽くされます。

> 「もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」（Ⅰコリント 3:14-15）

残るものとは、 信仰・希望・愛 つまり御霊の実です。これらは永遠の性質を持ち、天国へ持っていくことができます。しかし、この世界の富は何一つ天国に持っていくことはできません。本人が天国に行くことはできるが、手にするものは何もないということです。つまり、イエス様が一ミナのたとえで語られた 「何も残らない生き方」と同じです。

クリスチャンの生き方は二つです。

① 永遠に残るものを建てる生き方（勝利者）

イエス・キリストという永遠の土台の上に、 福音を語り、 信仰・希望・愛という永遠の実を築いていく生き方で、“残る建物” を建てる生き方です。

② 残らないものを建てる生き方（敗北者）

救われているのに、 以前と変わらない生き方を続け、見える安心やこの世界の富を積み上げる生き方で、これは“焼けてしまう建物”を建てる生き方です。

イエス様は、「残らないもののために時間を費やす生き方をやめ、永遠に残るもののために時間を使いなさい。」と語っておられます。

その最も確かな方法が、福音を語ることです。福音を語れば、 必ず困難が訪れます。その困難の中で、家族や友人の救いを祈るなら、聖霊様が必ず私たちを助けてくださり、その結果、永遠に残る信仰・希望・愛が育つのです。

「ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。」（ルカ 19:27）

イエス様を受け入れない者は、神の国に入ることができないので、滅びるしかありません。非常に厳しい言葉ですが、この後十字架に向かわれるイエス様にとっては、真剣勝負なのです。

救われていない人には、「私を受け入れなさい。」、救われた人には、「助け主が共におられるから、恐れないで福音を語りなさい。」と、ザアカイの出来事と一ミナのたとえを通して、イエス様は強く語っておられます。